
魔界島によろこそ

spring

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界島によっこそ

【Nコード】

N1945K

【作者名】

spring

【あらすじ】

俺は、正直、後悔している。親元を離れようと思った事。自立して、勝手に生きていると、勘違いしていた自分自身に。そんな事はない。ありませんでした。俺は、後悔をした。

こんな島に来てしまった自分に。

拝啓

魔界市

五月 日。

背景 義妹と両親へ。

前略。

お元気ですか。俺は今の所元気です。これが遺書となっていない事を祈ります。

春の麗らかな日差しの中、美しい花々が咲き乱れ、青々とした木々が当たり一面に広がり、隣接した海が若干眩しく見える今日この頃です。

さて、さつそくで悪いのですが、俺、死ぬかもしれませんが新生活に自ら望んで進み、親元を離れた俺ですがそろそろ日常が恋しくなりました。恋しいというよりはもはや渴望に近いです。

.....それというのも、俺は今、確実に死に瀕しているからです。

ええ、ええ、分かります。こんな事書いて頭がおかしくなったりかと思うでしょう？俺も思います。出来れば夢であって欲しいとも思います。体がギシギシと痛いのが妙に現実染みて嫌です。間違いなく悪夢です。今も厳しい監視の中、この手紙を書いています。正直これがあなたの方の手に届くかどうかは甚だ疑問です。届く前に俺が息絶える方が早い気がします。そうでも無かったら幸いです。

先程述べたように、俺の周辺の状況はとても芳しいとは言えません。しかし、その理由は他人に話して信じてもらえるかどうかは、書いている俺自身、自信がありません。話半分ではなく真剣に書いているのでどうかそのつもりで読んでもらえたら幸いです。

どうやら俺は『化け物』の巣にむざむざ足を運んでしまっ

たみたいなのです。

比喩ではありませんのであしからず。

見た目だけ人間に化けた、まさしく化け物魑魅魍魎が跋扈し、日々俺の生命を脅かし俺の精神は痩せこけるばかりです。冗談ではありません。いつ腹に収められてしまうのだろうかと怯える毎日です。

何度も脱走を試みましたが、包囲は頑丈でとても一介の高校生では抜け出す事は出来ません。これでもう義妹の顔が見れないと思うと涙が溢れるばかりです。

俺をエサと呼んで憚らない吸血女、物凄い威圧感を持つ糸メイド、捕食者の蜘蛛女、怪力青色の親子、何か銃やら刃だかをやたら振り回すイカレ野郎、獰猛な狼女、そして俺の後ろのアレを狙う変態。

しかし何よりも恐ろしいのは、化け物の親玉にして、もっとも最強最悪の存在です。

とにかく俺は未だに五体満足ですが、それも何時までなのだろうか分かりません。

そもそも、こんな事になったのは俺があんな事を言い出したからですが、今は後悔して止みません。

それでも、引き返す余地は幾つもあった筈だったのに俺はどこかで選択を間違ったのかと考えて辿りつくのは何時も決まっています。

そう、事の発端は、四月上旬のまだ少し肌寒いあの日の事です。

拝啓（後書き）

おつかれさまです

最初の異変（前書き）

更新は遅めです。

最初の異変

ガタンッ

不規則な揺れの中でひととき大きな縦揺れに、半ば意識の飛んでいた俺は、はっと目を覚ました。

見知らぬ景色に少し不安になる。ここはどこだ？ ガタン、ガタン、と不規則に揺れる小部屋とも呼べない畳四畳の休憩所が乱雑している。部屋と部屋の壁の区切りは無く、せいぜい通路を挟むくらいだ。そして、はめ込まれた窓から見える、空との境界をなくすような「赤い」海。

ああ、そうか、思い出した。俺はフェリーに乗っていたんだっけ。

うーむ。俺はまどろんでいたらしい。妙に体がだるいのは船の上で寝ていたからか。携帯をの電源を入れて、時間を確認する。午後五時少し前。到着時間は五時半だから、丁度三十分くらい前、だろうか。

うーんと体を伸ばして、凝り固まった体を解す。

携帯は着メロは鳴らないが、振動してメールの受信を告げた。

俺は大抵どんな時でもマナーモードのままだ。単純に使い分けるのがめんどくさいだけだ。

母と義妹からだった。全部で四通。三通は母。空港にはちゃんと着陸したのか、船には乗れたのか、何故連絡を返さないのか、といった具合のメール。

そう云えば、飛行機に乗る前に電源を切ってしまったので忘れていた。申し訳ない、と謝罪を添付して今は特に問題ない、と送っておく。

そして義妹のメール。正直、一瞬空けるのを躊躇う。

要約する必要もなく『向こうでも頑張ってください』と書かれているだけ。

簡単な文に、いまだきの中学生にしては淡々とした文章。そっけなさ過ぎるとでも思ったのか、文末に付いた顔文字も妙に余所余所しく感じてしまう。しょうがないとは思うが。

ありがとうと、こちらも送っておく。返信はこないだろう。母はこのやり取りに慣れてるし、義妹は、まあ最低限のマナーとして送ったのだから、意図的に返信は要らないようなメールにしていた。その方が向こうは気楽だろう。

ごろん、と畳の上に寝そべった。

見知らぬ天井と、白色の光が起き抜けの目にはキツイので手で隠す。ああ、俺は知らない場所に来たんだな、という実感が湧き上がる。寂しい気もするが、楽しみだ、という気持ちも大きい。

羽田から鹿児島まで一時間半。飛行機で行き、電車とバスを乗り継いでその港から定期船に乗った。俺は不幸体質なのでどこかで事故が起こるかもしれないと思うと緊張で寝れなかったが、逆に鹿児島から五時間の船旅では、それが祟って寝こけてしまった。

ブラリ一人旅、ではない。俺の通う高校に行く為だ。

日本領土の南端、離島、『役ノ島』。本島から航空機で約一時間、船では五時間かかるだけあって、問題ないように医療施設や生活用品の類には十分な施設がある。事前に俺が調べた話だと、直径六十キロの円形に近い五角形の、日本では九番目に面積がある島で、それだけ物品の需要もあるかららしい。

だが、そこを端的に表すなら『ド田舎』、だ。

コンビ二はないし、電車やタクシーの類すらない。典型的な田舎だ。周りが海なのもそのイメージに拍車をかけている。まあ、大人の島なら島の端から端まで徒歩一日で到達出来るので、必要がない現実なのだ。

俺はその島に一度だけ行ったことがある。

といってもガキの頃、十年近く前で、それも一週間程度の滞在で当時の様子なんか結構うる覚えだし、実際島の名前や地理に関してはここ半月で覚えた事だ。俺が役ノ島学園に入学する談で、色々調

べてる内にそのことを知ったに過ぎない。

覚えている事もある。あそこのミカンが美味しいとか、トビウオが新鮮で美味しかったとかそういう記憶や、森ばっかで驚いた記憶、地元の子と遊んだ記憶。でもそれもここ数年思い出さなかっただけあって、どこをどう俺が好き勝手に思い込んでいるかなんか分からない。実際の道なんかは全然分からないだろうな、きっと。

「よつと」

体を起こした。ちょっと頭が揺れる感じがして気持ち悪いが、平気だ。昔から乗り物酔いだけはしたことがない。どうでもいいが。

到着まで時間が少しある。体を解す意味を込めて、俺は休憩所から降りて移動することにした。

フェリーの五時間は相当長い。ちょっとした娯楽、小さいゲームセンターなどもあるのは幸いだ。

俺は近くの食堂の入り口の自動販売機でお茶を購入、風に当たりに外に出た。

船の外は閑散としていて、人気は殆どなかった。船の前方には島がはつきりと見えた。役ノ島はもう目の前だった。

「綺麗だね」

「？」

聞きなれない声が、右から聞こえて、俺は横を向いた。

いつの間にか、人が一人、横に立っていた。手すりに体を預けながら、真っ直ぐ俺を見ていた。

いつから居たのだろうか、それは金色の髪をした青年だった。年齢は、二十半ばだろうと思うが自信はない。

碧い不思議な深みのある瞳に何となく吸い込まれそうな気がした。俺と同じ程度の身長と、日本人では有り得ない形で整った線の細い顔。一瞬、同性かどうか疑った。

青年はにっこりと笑った。

誰に？ というよりも俺しかいない。

「島を、見ていたんだろうと思っていただけ、違った？」

あまりに流暢な日本だった。

俺は驚きながら、どこか安心した。理由は明確過ぎる。英語は得意じゃないからだ。

「ええ、綺麗です。こんな綺麗な景色、初めて見たかも。パンフレットとか写真で見るとはまた違う感じで」

「ああそう？ でも僕は 君に言っているんだけどな」

「は？」

今物凄い事言わなかったかこいつ。

「いやいや、なんでもない」

誤魔化すかのように青年は手を振った。そして俺にじろじろと遠慮のない視線を向けてきた

値踏みされているようで、正直気分良くない。

「君の両親、親戚でもいいんだけどさ、何か宗教とかやってる？」

「はあ？ いや、やってないですけど。根っからの無宗教ですうちは」

突飛な質問だった。新手の宗教団体の誘い、の訳ないだろうし。

どこか胡散臭いような気が。返事を返すんじゃないな。それにしても両親か。正直、今一番聞きたくなかった話題だった。もしかしたら、妹や「その父親」は何か宗教信仰があったかもしれないな。青年は感心したような声を上げた。

「へえ、それにしては……………なかなか。ああ、お腹空いちやうなあ、今なら誰も居ないし」

ブツブツと呟きながら青年はどこか軽薄な動作でお腹に手を当てた。そして俺の方をちらりと見た。

何故か俺はその動作に鳥肌が立った。

「ん、おおっ？」

……………ずずん。絶えず聞こえていた波の中でも、一際大きい音がして、船が一瞬グラついた。

俺は転ばないよう慌てて手すりをしっかりと握った。一瞬、体が海に投げ出されそうになって冷やりとした。

だというのに。

青年はまるで何事も無かったかのように、手すりから手を離れたまま、微動にせず立っていた。まるで揺れが無かったかのように平然と。気が付いた様子も無く。

俺は突然、衝動的に違和感を覚えた。この青年に対して。僅かにしかし確かに。

「あああ、もう我慢が出来そうにないよ」

ずっと青年がこちらを向いた。その瞳はまるで熱に浮かされた子供のような目だった。

欲望に従順そうな意味で。

「だ、大丈夫ですか……………」

「平気さ。ただちよつと興奮しちゃってね。僕、こんなに喜ばしい日は中々ないよ。こんな事なら、本島に戻った意味、無かったかもでもそうしたら船に乗る機会も無かったかな？」

「へ？」

「ほら、あれ見える？」

青年がまたもや唐突に船の外、役ノ島、その先の水平線にそって横に指を滑らせた。丁度島の東あたりに。

「何か、つて鯨、ですか。いや、でもあんな大型なんてこんな島の近くに来る筈が……………」

「ああ、あれは鯨なんかじゃない。

龍だ。暑い日はああやって

海で水浴びしているのさ。この辺りの海の神、恵比寿に許可を取ってね」

「はい？」

突然ワケの分からない事を青年が微笑みながら囁いて来た。龍なんていうわけがない。そう思ったが、青年がこつちをじつと見つめていた。

「君、すつごく綺麗だ……………」

ぐつと、青年は何時の間にか俺と距離を詰めていた。

どこか、色っぽいような？ というかこいつ近くないか。気が付

俺が殴った顔を抑えながら青年は低い声で言った。

正直、ヤバイ雰囲気じゃない。

ずずん。そして運悪く、波に揺られて、船が大きく揺れた。俺はバランスを崩して転んだ。看板から足が滑って腰と手を打ち付けた。「痛てっ」

かなり痛い。だがこの体勢は危険な気がした。俺は急いで顔を上げる。さっきと同じように、男は全く動じずに立っていた。

しかし男は、無言で直立したまま船の外を向いていた。

「……………」

てつきり襲い掛かって来ると思ったが、どうやら意識が反れたらしい。

その時、俺は逃げよう、と思った。こんな奴、相手にしてられない。

そしてそれを実行に移そうと思った瞬間に、男はぼそりと呟いた。

「……………」
「わだつみ」め。何のつもりだ」

ワダツミ？

そして俺が逃げ出すよりも早く、それは起こった。

俺は、自分自身の目を疑った。

海水が、いきなり、手すりに打ち付けるような高さで、巻き上がった。さらに船を飛び越え、高く空中へ突き抜けていった。そして落下する、どこかって？ 船に決まっていた。

金属の塊が激突したかのような鈍い音がして、水は看板に叩きつけられた。

俺は、恐怖に取り付かれて走って逃げた。マジで怖かった。こんな恐怖を現実で感じた事はなかった。俺は無我夢中で走って逃げた。気が付いた時、船はもう止まっていて、後ろにも誰も追っては来て居なかった。俺は船の看板からずっと離れた場所でヘタリ込んでいた。

「……………」
何なんだよあいつは」

これが、俺の初めの異変。

この時、俺が取れた最善の策はただ一つ。このまま船に留まって誰にも会わずに家に帰る。ただそれだけだった。だけど、そうはしなかった。それが日常に戻る最終切符だと気が付いたのはもうすぐだ。

だから、これが俺の日常の『最初』の異変。

2話

船から出ると、憂鬱だった気分が別のなにかに覆いかぶさられた。真つ赤な太陽が海と大地を照らしている。船と港を繋ぐ橋から見下ろした海は驚くほど澄んでいて、すつと奥まで見渡せるような気になる。水平線から落ちる太陽が、なにか、じーんとした気持ちを俺に沸かせてくるのだ。荘厳な美しさがそこにはあった。

俺は軽く感動をしながら、最後尾からゆっくりと船から下りる。年季の入った防波堤に足を下ろした。

「いやあ、よく来たねえ！ 待つてたよ！」
船を下りると、快活な声に呼び止められた。俺はそちらを振り返る。

浅黒く焼けた顔の、半そで長ズボン姿の女性がこっちに向かって手を振っている。

誰だかは一瞬で分かった。俺も手を振り返す。

「理恵おばさん。久しぶり」

「ほんにねえ！ サクちゃんも大きくなって」

小柄な体格で俺の胸辺りまでの身長しかないのだが、とにかく何故か存在感があるので、人垣にいてもすぐに分かった。朗らかな笑顔は簡単に、俺に誰かを彷彿とさせる。母だ。いや、この場合、母が、おばさんに似ていると言っべきか。理恵おばさんは俺の母の姉

に当たる人だから。

歳も離れて、喋り方も性格も顔も身長も全く違う二人だが、どこか似ている。

ちなみに俺の名前は相沢 策。変な名前だ。祖父の名前が佐久助さくすけだったので一文字取るという非常に迷惑な被害をこらむり、以後俺は逢う人には大概その経緯を説明する羽目になってしまっている。

「おばさんは変わりませんね。小さい頃にあつたときと全然」

「やだね、もうおばちゃんよ。サクちゃんは見違えたけどね。男前になつてる」

おばさんは日焼けした手を差し出すと、こつ言ってくれた。

「役ノ島によつこそサクちゃん。よろしく」

「はいつ。こちらこそよろしくお願いします」

俺も握り返して、挨拶をする。

はじめて逢つた頃とおばさんは本当に全然変わらなくて俺は、少しかだけ安心した。防波堤から港町の宮浦町の波止場まで歩く途中、おばさんと幾つか話をした。

「フェリーで来て正解だつたよ。飛行機は風が強くて上空まで来たのにも戻つていったからねえ」

「俺の場合、単にお金を節約しただけなんですけどね。フェリーだと子供料金で千二百円。飛行機は高すぎますよ」

さらに追記すると、俺は飛行機が嫌いだ。羽田から鹿児島までは仕方ないとしても、何度も飛行機に乗り換えるのは、正直御免だった。どうも、子供の頃、飛行機に関して良くない思い出があるらしく、乗る度に、何故か憂鬱な気分になるからだ。こちらは恥ずかしいので言わないが。

「それにしてもサクちゃん。本島からこつちの学園に来たがる子なんてあんまり居ないよ。皆出て行つちゃうから」

おばさんは少し意外そうな顔でそう言う。

「色々事情がありまして………母親には大反対されましたけど」

「へえ、恵美が」

「……………はい」

「この島には、あの子も思うところがあるのかもねえ」

遠くを眺めるような視線で、おばさんは静かに独白していた。

「おばさんには色々迷惑かけて、本当にすいませんでした」

俺はおばさんに頭を下げた。

「いいのよ。おじいさんの家なんて誰も使ってないんだし。定期的に掃除はしてたから汚くはないと思うよ。……………じゃけど、サクちゃん。しっかりと恵美と話し合ったの？」

「……………」

理恵おばちゃんは痛い所を的確に突いてくる。母と性格は全然違うのだけど、そういう所はよく似ている。まっすぐな目でじつとこちらを見つめてくると、全部見透かされている気がしてくる。

「すごく反対されましたけど、最後は俺の好きなようにしろって言ってくれました」

おばさんはなにもかも悟った顔で苦笑を浮かべた。

「うちの家系の奴はみんな、言い出したら頑固なんだから。どうせ喧嘩別れでもしてきたんだろ？」

正解。穏やかな会話にするはずが、お互いヒートアップして結局、最終的に殴りあいにも発展してました。といってもこっちが一方的に殴られるだけなのだが。母は強い。

「私が口出すことでもないし、好きにすればいいのさ。じゃけど、電話はしてあげなさいよ」

「はい。母の怒りがさめたら。でも、気まずいんですよ。……………義妹がいるので」

俺は、初めて義妹と逢った日のことを思い出してゲンナリする。全然、会話は弾まないし、目も合わせてくれないし合ったと思えばすぐに逸らされてしまう。あの気まずい時間の味わったとき、すでに、家を出る選択肢は俺の頭の中にあっただのかもしれない。

「そうか。聞いた話だと結構上手くいってるって聞いてただけだね」

「母って、すぐ物事を楽観視するんです。大体、外食行ったら、前触れもなしに恋人とその娘を連れ来ますか普通に考えて」

「サプライズにも限度があるだろ。」

俺は超普段着だったのに向こうはめかしこんで来てるし。

飯がつつが食ってたら突然、目の前に座って挨拶されても困るから！ 後は若い二人だけで、ねっ、じゃねえんだよ！ 気まずいわ！

俺は思わず思いのリビドーが暴発する。今でもあの沈黙を思い出すと悶えたくなる。窒息死するかと思った。全く、家の母親の思考は大概どうかしている。

「はははっ！ さすが恵美、よくやるねえ！」

「……………いや、さすがって」

忘れてた、この人もその家系の一人だった。そもそも女傑家系である家とはかく女の地位が高い。親戚は少ないけど皆が皆ちよつと（謙遜表現）変わっている方が多く、比較的まともな部類の理恵おばさんだが、間違いなく家の血脈ではあるのだ。とにかく豪胆で大雑把。

「はっはっは、ま、がんばりなっ！ サクちゃん！」

背中を勢いよく叩かれる。痛い。

「は、はいっ」

おばさんの灰色のバンに荷物を乗せ、ゆつくりと島の端を走っていく。荷物といっても旅行に必要な手荷物は少なく、大体の生活用品は飛行機に乗つけて先に送ってある。つまりほとんど手ぶらに近い。飛行機が引き返してしまったので、届くのは明日以降になるが、

田舎といっても必要最低限の必需品店はあるらしいので、（車で飛ばせば島のどこにでも三時間以内にいけるらしい）不安にはならなかった。

島は本当に森ばかりで、見渡す限り森、森、森、海、といった風情。病院や大きなスーパーがあったりもするのだが、その横は全部、森。

鹿、猿、狸注意の看板を時折見かける。

俺はじつとその光景をながめていた。どこか懐かしい気分になったのは、ずっと昔の記憶かなにかなだろう。

宮浦、二奏、二つの町が続く。正直に言ってしまうと、どこもあんまり景色は変わらない。

俺の目的地はさらに先にある永川だった。もう、そう遠くないと思う。

永川の先にはもう街はない。山と海に囲まれた場所で、その先には現役の時台が一本ぽつんとあるだけだ。

段々と日が暮れて、夜になっていく。六時半になると辺りは本当に真っ暗になってしまった。

俺は話す会話も一段落着いて、少し手持ち無沙汰になると、さつき船に乗っていたときにあった出来事を思い出した。

よく考えてみればまず間違いなく幻覚の類なのだろうが、あんなリアルな幻覚、本当にあるのだろうか。結局、俺は船員に相談する事もなく、現場に戻ることもしなかった。馬鹿にされるのがオチだろうし、現場に戻るのは何故か気が引けた。まさかいるとは思えなかったが。

俺は、たぶん、白昼夢でも見ていたに違いない。

あるはずがないと感じながらも、俺は車の窓を閉めて風を遮ってから、それとなく、おばさんに訊いてみた。

「おばさん。この島で外国人はよく見かけますか」

夜道に鼻歌を歌いながら運転していたおばさんは、怪訝な顔をした。

「なんだいに急に。うんにゃ、そんなに多くはないよ。自然は綺麗だけど、大して珍しいものもないから」

「なんだか訊くのが恥ずかしい気もしたが思い切って訊く。」

「じゃ、話変えますけど。……この島に怪物とかがっています？」

「怪物う？」

「おばさんは今度こそ、目を丸くする。」

そして大声で笑う。

「ははははは！ おう、いるかもねえ！ ここは森が多いし、見ての通り夜は真っ暗だ。もしかしたら居るかもしれないよ！」

「そう言つて、にい、とこちらに向かつて目を細める。子供に言うみたいに言われると少し腹が立ったが、その対応に不安が晴れたのは事実だった。」

「おばさんは、見たことはないんですか、お化け」

「俺は少し、安心しながら言つた。しかし、おばさんはこんな事を言う。」

「ないねえ。じゃけど、おる気はしてる」

「へ」

「だって、サクちゃん、あんたのおじいさんがこの島に来た理由、知ってるだろ？」

俺は、思い出して、頷く。

「まあ、うん。……『妖怪に逢いに行く』、でしょ」

俺は若干慚然としながら言つた。

「だけど、これって」

「おっと、真相は誰も知らないことさね」

「おばさんは文句を言いかけた俺を遮るように言う。」

「おじいさんは、確かに家族を捨てて一人こんな辺鄙な場所に引込んだ。理由はサクちゃんの言つた通り。もしかして、本当に妖怪に逢いに行ったのかもしれないし、ただ家族を見捨てただけなのかもしれない。私だってそのことはずっと恨んでる。じゃけど、真相はおじいさんだけが知っていることさ」

「……うす」

俺は、それ以上は言わなかった。結局、俺は当事者ではなかったし、語るべき言葉もないからだ。

「ま、ロクデナシだったのは間違いないね。ははははっ」

おばさんはまったく気にしていないとばかりに大声で笑った。

それから、少し経った。

永町に近づいたとき、なにか音が聴こえてきた。

ああ　ん。　ああ　ん。

「……おばさん、なにか聞こえない？」

ああーん。　ああ　ん。

「ほんとだ。なんだろう。野犬かね」

役ノ島の道の多くは山の麓に隣接している場合が多い。というよりもほとんどがそうだ。暗い鬱蒼とした山から響くような遠吠えが、何度も何度も聞こえる。今、通っている場所もそうだが、屈折した細い道にぼつぼつと街頭があるだけのこの場所は、酷く薄暗く、山の方は全く見えない。

ああーん。　ああ　ん。

「こ、こんな事よくあるの？」

「うんにゃ、初めてだね。タヌキなら最近ちよつと問題になってるんだけど」

前を向いたまま、おばさんは少し驚いた顔でそう言う。俺は周囲を見渡しながら、その遠吠えがどこから響いているのか探した。車のライトと電灯だけが頼りの暗い道では、全然意味のない行為かもしれないが。

がさがさっ。

車脇のすぐ隣にあったクワズイモの群生がばさばさと揺れた。ざざっと、車のライトの横明かりに照らされた真っ白い固まりが走り抜けていくのが見えた。

「今、なんかいませんでした？」

「見てなかった。鹿かなにかじゃないかい」

「いや、もっと大きかったような……まるで」

あおーん。あおーん。

遠吠えが、山に木霊し続ける。俺は、今見た物を吟味しながら、落ち着くべく、静かに息を吐いて目をつぶった。疲れているんだ。そうに決まっている。

まるで、大きな狼みたいだった。俺はその言葉を飲み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1945k/>

魔界島ようこそ

2010年10月8日12時20分発行